

中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証

長谷川修治*, 中條清美**, 西垣知佳子***

Examining the Utility of Junior and Senior High School English Textbook Vocabulary

*Shuji HASEGAWA**, *Kiyomi CHUJO*** and *Chikako NISHIGAKI****

Junior and senior high school English textbooks are written in accordance with the Course of Study guidelines provided by the Ministry of Education, Science, and Culture. These guidelines are revised about every ten years. In 1989, the guidelines were revised to reduce the content level of several subject areas taught in junior and senior high schools across the country. In order to measure what impact there might be with regard to English education, we examined the pre-reform vocabulary of junior and senior high school textbooks (used nationwide in 1988) and compared the efficacy of the vocabulary to post-reform textbooks (used nationwide in 2006). It was found that the overall junior and senior high school text coverage for practical activities declined. The implication of this study is that in order to support language acquisition, the idea of content reduction in the national curriculum might be revisited.

キーワード：英語教科書，高等学校，実用性，カバー率，語彙

1. はじめに

近年，我が国では，日常生活から経済活動に至るあらゆる面でのグローバル化や情報化の進展を反映し，「使える英語」という「実用性」を重視した英語教育が求められている。そのような強い要望は，「実践的コミュニケーション能力」の育成を目標とした，中学校では1998年告示・2002年施行¹⁾，高等学校では1999年告示・2003年施行²⁾の，現在実施されている学習指導要領にも反映されている。学習指導要領に「コミュニケーション能力」という言葉が登場したのは，現行の一つ前にあたる中・高ともに1989年告示・1994年施行のものからである^{3),4)}。

したがって，「コミュニケーション能力」という言葉の登場するさらに一つ前の，中学校では1977年告示・1981年施行⁵⁾，高等学校では1978年告示・1982年施行⁶⁾の80年代に使用された教科書と現行の教科書を比較すれば，我が国の英語教育の基盤を担う検定教科書における「実用性」の具体的な推移を如実に観察できるのではないかと考えられる。

学習指導要領は約10年ごとに改訂されるが，そのたびに「英語」でまず話題となるのは「新語数」である。これは，第二言語の読み，書き，話し，聞くに卓越した者は広範な語彙力があり (Folse, 2004: 25)⁷⁾，なかでも読解力は語彙力とかなり関係が深い (Laufer, 1997: 20)⁸⁾という実験研究の結果からも頷けることである。Canale

*千葉県立茂原高等学校教諭

**日本大学生産工学部教養・基礎科学系准教授

***千葉大学教育学部准教授

(1983)⁹⁾によれば、「語彙力」は「コミュニケーション能力」の4つの構成要素である「文法能力」、「社会言語学的能力」、「談話能力」、「方略的能力」のうち「文法能力」のなかに位置付けられ、「使える英語」という点では必要不可欠な部分を占める。しかし、伊村(2003:117)¹⁰⁾によれば、1951年発表の学習指導要領と現在実施されている学習指導要領を比較すると、中・高の合計新語数の上限が、6,800語対2,700語で半分以下になっている。はたして、この2,700語でどこまでコミュニケーションが可能であり、実際に「使える英語」として機能するのか検証調査が必要であると考えられる。

「使える英語」に関して文部科学省は、2003年発表の『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』¹¹⁾において、「日本人全体として、英検、TOEFL、TOEIC等客観的指標に基づいて世界平均水準の英語力を目指す」(p.1)と述べている。ここに示された客観的指標のうち、高校卒業レベルの英検2級に対して長谷川(2003)¹²⁾は、2001年から過去10年間にわたりテスト問題に出現する語彙を調査した結果、読解の目安とされる95%のカバー率を中・高の検定教科書語彙で達成するのは困難であると報告している。また、TOEFL、TOEICを含め、大学生に必要とされる音声英語と文字英語の言語資料14種に対して、80年代、90年代、2000年代の通時的調査をした長谷川・中條(2004)¹³⁾は、中・高検定教科書語彙で可能となる実用レベルは、「サバイバル英会話」程度であると判定している。

しかしながら、これらの検証調査で使用された英語検定教科書は、採択数の最上位にある中・高各1シリーズを組み合わせたサンプル調査であったため、我が国の検定教科書語彙の実態を広く観察するにはサンプル数を増やした広範な調査がさらに必要であろうと考える。特に、現行の高校用英語教科書は従来のものよりバラエティーに富んでいるとの報告(中條・西垣・長谷川・内山,2008)¹⁴⁾を考慮すると、サンプル数を増やして、「使える英語」という観点からその具体的変化を明らかにする必要がある。なかでも、大学進学者数の多い高等学校で使用される代表的な検定教科書に関して、使用した教科書の違いによって生ずる語彙力の差を明らかにできれば、大学での英語教育を効果的に行う上での有益な資料になると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「実践的コミュニケーション能力」の育成を目標とする現行の学習指導要領に基づく中・高の英語検定教科書語彙で可能となる実用性のレベルを、学習指導要領に「コミュニケーション能力」という言葉の登場しない1980年代の教科書語彙と比較し、その具体的

変化を複数のサンプル調査を通じて量的に明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 サンプル調査に使用した中・高の英語検定教科書

サンプル調査に使用した中・高の英語検定教科書は、日本人英語学習者の一般的傾向を探るため、『内外教育』(時事通信社,1987,2005,2006)^{15),16),17)}と『教科書レポート』(出版労連,1987)¹⁸⁾に公表された資料から採択数の多さを考慮して選定した。また、現行の教科書と1980年代の教科書を比較する必要から、現行の教科書名に1980年代の教科書名がそのまま保持されているものを候補とした。さらに、その候補の中から、高等学校用は大学進学者数の多い高校で使用される上級レベルの教科書5シリーズとした。シリーズの構成は、学習指導要領の新語数を表示する際の基準となっている「英語I」「英語II」「リーディング(1980年代は英語II B)」とした。使用した中・高の英語検定教科書は、下記のとおりである。

3.1.1 中学校英語教科書

現行(2000年代)と1980年代で採択数最上位の中学校教科書は、下記に示した *New Horizon 1, 2, 3* (東京書籍,1986,2002)である。

- ① 太田朗, 伊藤健三, 日下部徳次, *New Horizon English Course 1, 2, 3*, 東京, 東京書籍, 1986.
- ② 笠島準一, 浅野博他, *New Horizon English Course 1, 2, 3*, 東京, 東京書籍, 2002.

本稿では、以下、*New Horizon* と記す。

3.1.2 高等学校英語教科書

本研究で調査した「英語I」「英語II」「リーディング(1980年代は英語II B)」の教科書は、下記に示した、*Crown* (三省堂,1988,2006), *Mainstream* (増進堂,1988,2006), *Milestone* (啓林館,1988,2006), *Sunshine* (開隆堂,1988,2006), *Unicorn* (文英堂,1988,2006)の5シリーズである。

- ① 平野敬一他, *THE CROWN ENGLISH SERIES I, II, IIB*, 東京, 三省堂, 1988.
- ② 霜崎實他, *CROWN English Series I, II, Reading*, 東京, 三省堂, 2006.
- ③ 安藤昭一他, *MAINSTREAM I, II, IIB*, 東京, 増進堂, 1988.
- ④ 鈴木寿一他, *MAINSTREAM I, II, Reading*, 東京, 増進堂, 2006.
- ⑤ 成田義光他, *MILESTONE English Course I, II, IIB*, 東京, 啓林館, 1988.
- ⑥ 島田守他, *MILESTONE English Course I, II, Reading*, 東京, 啓林館, 2006.
- ⑦ 土屋澄男他, *Sunshine English Course I, II, IIB*,

東京，開隆堂，1988。

- ⑧ 追村純男他，*SUNSHINE English Course I, II, Readings*，東京，開隆堂，2006。
- ⑨ 吉田正俊他，*UNICORN ENGLISH COURSE I, II, IIB*，東京，文英堂，1988。
- ⑩ 市川泰男他，*UNICORN ENGLISH COURSE I, II, READING*，東京，文英堂，2006。

本稿では，以下，これらの両年代にわたる5シリーズを，*Crown, Mainstream, Milestone, Sunshine, Unicorn*と簡略表記する。

3.2 実用性のレベルを調査するために使用した言語資料

実用性を計測するための言語資料を選定する際には，グローバル化・情報化の中で『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』において言及されている内容を考慮し，TOEIC，TOEFLを含め，大学生に必要とされる言語資料という観点を重視した。この観点に基づき，まず，**Table 1**に示した5つのジャンルを設定した。

5つのジャンルは，(1) 英語コミュニケーション能力試験 (TOEIC, TOEFL)，(2) 大学留学 (チュートリアル，大学入学案内)，(3) 情報収集 (英語ニュース，英文雑誌・英字新聞)，(4) 日常生活 (サバイバル英語，生活案内)，(5) 趣味・教養 (映画，小説) である。

次に，各ジャンルの下位区分として，音声英語と文字英語の言語資料を収集した。なお，(1)については，国際ビジネスマンとしての基本的英語コミュニケーション能力を測る TOEIC と，英語圏の大学・大学院留学に必要な英語コミュニケーション能力を測る TOEFL の2種を使用した。また，(3)についても，日本人英語学習者が到達目標にすると考えられるもの (PBS, TIME) と，初心者向けの教育的配慮のあるもの (VOA, News for You) という理由から2種ずつとした。

したがって，**Table 1**に示したように，最終的には，5ジャンルの下に，音声英語と文字英語各7種の言語活動から成る合計14種の言語資料を使用した。これらは，長谷川・中條 (2004)¹⁹⁾で使用された言語資料と重なり，その調査報告の検証も兼ねることとなった。各言語資料の出典は中條・西垣・長谷川・内山 (2008)²⁰⁾に詳述したの

で，本稿では割愛した。

3.3 調査の手順

3.3.1 語彙表の作成

高等学校教科書および中学校教科書の本文を，入力，校正した後，教科書ごとに単語の基底形 (base form) に基づく語彙表を作成した。なお，語彙表の比較・観察の際には固有名詞や数字等は特定のテキストに集中して出現することが多く (Nation, 2001: 19-20)²¹⁾，正確なカバー率を求める際に障害となることが報告されている (Chujo and Utiyama, 2005)²²⁾。そこで，本研究では，語彙表の作成に際してはこれらの語を人手で取り除いた。

実用性のレベルを調査するために使用した言語資料についても，入力，校正した後，同様の基準に基づいてそれぞれの語彙表を作成した。

3.3.2 異語数と延べ語数の計測

高等学校教科書および中学校教科書より作成した語彙表から，中・高各教科書の異語数と延べ語数，および中・高教科書を合わせた場合の異語数を計測し，現行と80年代の推移を計量的に比較した。

3.3.3 カバー率の計測

上記で求められた結果を使用し，中・高を合わせた検定教科書語彙5セットが目標言語資料とした音声英語と文字英語の各5分野7種の語彙をどの程度カバーできるかという「カバー率 (text coverage)」を計測し，現行と80年代の推移を計量的に比較した。カバー率とは，ある語彙が，テキスト全体の延べ語数の何パーセントを占めるかという指標であり，本稿の場合，次の式で求められる。

$$\text{カバー率 (\%)} = (\text{ある教科書語彙表でカバーする実用言語活動語彙表の延べ語数}) \div (\text{実用言語活動語彙表の延べ語数}) \times 100$$

次に，カバー率を求める際，音声英語と文字英語各7種の言語活動の言語資料については，安定した計測値を得るために必要とされるサンプルサイズである1,500語 (Chujo and Utiyama, 2005)²³⁾のサンプルを，言語活動ごとに5個ずつ無作為に抽出した。そして，各サンプルにつき，検定教科書語彙のカバー率を求め，5つのカバー

Table 1 Language Samples Used for Measuring Text Coverage of High School Textbook Vocabularies

ジャンル	音声英語	文字英語
英語コミュニケーション能力試験	TOEIC (リスニング・セクション) TOEFL (リスニング・セクション)	TOEIC (リーディング・セクション) TOEFL (リーディング・セクション)
大学留学	チュートリアル	大学入学案内
情報収集	PBS (TV ニュース) VOA (ラジオ・レポート)	TIME (英文雑誌) News for You (ESL 英字新聞)
日常生活	サバイバル英語 (生活英語)	生活案内
趣味・教養	映画 (Titanic)	小説 (Harry Potter)

率の平均を算出した。

ただし、TOEIC、TOEFL は試験問題という性格から、上述のように一律 1,500 語のサンプルを 5 個抽出するというサンプルサイズの基準を適用せず、1 回分のテスト問題全体（約 3,000 語）を 1 個のサンプルとして、2 回分のテストを対象とした。そして、テスト問題に使用された語彙に対するカバー率 2 回分の平均を算出した。

なお、カバー率を調査するために使用した音声英語と文字英語各 5 分野 7 種の言語資料の延べ語数、異語数は、中條・西垣・長谷川・内山（2008）²⁴⁾に詳述したので、本稿では割愛した。

4. 結果と考察

4.1 中・高の英語検定教科書語彙の量的変化

4.1.1 中・高の教科書ごとに見た異語数と延べ語数の変化

まず、中・高の英語検定教科書の異語数と延べ語数が、1988 年度と 2006 年度を比較した場合、それぞれどのような変化を遂げているかを観察する。調査対象とした中学校教科書 *New Horizon* の結果を **Table 2** に、高等学校教科書 5 シリーズの結果を **Table 3** に示した。両表においては、異語数、延べ語数、そしてそれぞれの増減を 2006 年度から 1988 年度を引いた語数で示した。さらに **Table 3** においては、表の最下欄に、異語数と延べ語数の教科書 5 シリーズの各平均値、および教科書シリーズごとの異語数と延べ語数の各増減についてもその平均値を記した。

Table 2 からは、1988 年度と 2006 年度の両年度において教科書の採択数で最上位にあった *New Horizon* の異語数と延べ語数が、2006 年度に減少していることがわか

る。1980 年代では学習指導要領による中学校英語の新語数が 900～1,050 語、2000 年代では 900 語となっていることから²⁵⁾、学習指導要領の指定語数の影響が英語検定教科書に直接現れていると考えられる。

高等学校用の英語検定教科書を調査した **Table 3** を観察すると、異語数では *Crown*, *Sunshine* が減少しているのに対し、*Mainstream*, *Milestone*, *Unicorn* は増加している。学習指導要領の高等学校英語の新語数は、1980 年代では「中学+1,400～1,900 語=2,300～2,950 語」、2000 年代では「中学+1,800 語=2,700 語」となっており²⁶⁾、学習指導要領に示された新語数の上限は減少した。すなわち、1980 年代の新語数の上限の 2,950 語に注目すると、2000 年代の 2,700 語の方が 1980 年代よりも少ないことになる。一方、1980 年代の新語数の下限である 2,300 語に注目すると、2000 年代の方が 1980 年代よりも多いことになる。これを反映してか、**Table 3** に示された高等学校教科書に実際に出現している新語数は、個別の教科書によって、減少しているものも増加しているものもあることが判明した。

延べ語数に関しては、**Table 3** に見られるように、すべてのシリーズにおいて 2000 年代は 1980 年代よりも減少している。学習指導要領では、高等学校での「英語 I」「英語 II」「リーディング（1980 年代は英語 IIB）」の合計単位数が 1980 年代では 12 単位、2000 年代では 11 単位となり、2000 年代では 1 単位減少していることから、教科書全体で使用される延べ語数も減少したのではないかと考えられる。英語学習者にとっては、1 単位分の授業回数との減少とともに、実際の教科書でも英語に触れる総量が減少したと言える。

Table 2 Types and Tokens of 1988 and 2006 Junior High School Textbook Vocabularies

年 度	異語数		異語数の増減	延べ語数		延べ語数の増減
	1988	2006	(2006 年－1988 年)	1988	2006	(2006 年－1988 年)
<i>New Horizon</i>	834	728	－106	7,725	6,148	－1,577

Table 3 Types and Tokens of 1988 and 2006 Senior High School Textbook Vocabularies

年 度	異語数		異語数の増減	延べ語数		延べ語数の増減
	1988	2006	(2006 年－1988 年)	1988	2006	(2006 年－1988 年)
<i>Crown</i>	3,128	2,603	－525	50,378	34,751	－15,627
<i>Mainstream</i>	2,287	2,450	163	32,513	24,079	－8,434
<i>Milestone</i>	2,541	2,563	22	36,244	25,062	－11,182
<i>Sunshine</i>	3,115	2,335	－780	41,968	25,102	－16,866
<i>Unicorn</i>	2,624	3,161	537	48,201	32,776	－15,425
平 均	2,739	2,622	－117	41,861	28,354	－13,507

4.1.2 中・高を合わせた場合の異語数の変化

次に、中・高を通じて学習できる異語数は、1988年度と2006年度ではどのように変化したかを観察する。先のTable 2とTable 3に示した中学校教科書と高等学校教科書を1988年度と2006年度で各々合わせて、その異語数をTable 4に示した。各年度において、中学校では採択数最上位の教科書を使用した後、高等学校では5シリーズの教科書のうちどれか1シリーズを使用したと仮定して調査した。

Table 4から、2000年代は、学習指導要領に示された新語数の上限語数の中・高における減少を反映して、Crown, Sunshineは減少しているが、Mainstream, Milestone, Unicornは増加している。長谷川・中條(2004)²⁷⁾が実施した同様の調査では、使用したサンプルのUnicornの異語数は増加していたが、今回の検証調査では、Unicorn以外にも増加している教科書があること、逆に減少している教科書もあることが明らかとなった。このように、2000年代では、異語数が増加した教科書もあれば減少した教科書もあることから、学習指導要領の新語数が減少したからといって、必ずしも中・高を通じて学習できる教科書語彙が減少したとは一概に言えないことが確認できた。

続いて、どの教科書シリーズを使用したかによって生

ずる差として、「中学+高校教科書の異語数」の欄を、1988年度と2006年度で、異語数の最大と最小を比較してみる。結果、1988年度は最大がSunshineの3,239語、最小がMainstreamの2,428語、2006年度は最大がUnicornの3,250語、最小がSunshineの2,454語であり、両年度でともに800語前後の差があることがわかった。Sunshineは異語数の減少を補えるように2006年度はAdvanced Readingとしてリーディングの教科書がもう一冊用意されている。教科書の採択にあたっては、各出版社の教科書編纂方針なども検討する必要があると考えられる。

4.2 中・高の英語検定教科書語彙の実用性の変化

4.2.1 音声英語の言語活動

上記Table 4に示した中学校と高等学校を合わせて学習できる、年度別・教科書シリーズ別の語彙がどの程度の実用性を有するかを、3.2に示した実用性のレベルを調査するために選定した音声英語と文字英語各7種の言語活動のうち、音声英語に対してカバー率を計測した結果をTable 5に示した。

Table 5には、中学校卒業後に高等学校で使用する教科書シリーズがどれであるかによる違いがわかるように、5種の高等学校教科書名を記した。また、表の最右欄には7つの言語活動別に教科書5シリーズのカバー率

Table 4 Number of Types Appearing in Combined Junior and Senior High School Textbook Vocabularies

高校教科書名	Crown		Mainstream		Milestone		Sunshine		Unicorn		5種平均	
	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006
中学+高校教科書の異語数	3,236	2,709	2,428	2,585	2,678	2,686	3,239	2,454	2,760	3,250	2,868	2,737
異語数の増減(2006年-1988年)	-527		157		8		-785		490		-131	

Table 5 The Percentage of Spoken English Vocabulary Covered by the Textbook Vocabularies

高校教科書名	Crown		Mainstream		Milestone		Sunshine		Unicorn		5種平均	
	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006
TOEICリスニング	91.7%	91.1%	91.4%	90.4%	91.8%	91.4%	92.9%	89.7%	90.8%	92.2%	91.7%	90.9%
TOEFLリスニング	92.8%	92.2%	92.4%	91.8%	93.4%	92.2%	93.6%	90.8%	91.7%	93.2%	92.8%	92.0%
大学チュートリアル	92.5%	91.4%	92.9%	90.7%	92.9%	93.6%	92.6%	90.0%	91.3%	93.3%	92.4%	91.8%
PBS ニュース	88.7%	87.8%	88.0%	88.3%	88.5%	88.5%	89.3%	86.6%	87.0%	88.9%	88.3%	88.0%
VOA(ラジオレポート)	89.0%	89.5%	89.2%	89.8%	91.6%	90.7%	90.7%	87.9%	88.5%	91.7%	89.8%	89.9%
サバイバル英会話	96.5%	95.7%	96.5%	94.8%	96.4%	95.2%	97.1%	95.3%	96.6%	96.2%	96.6%	95.4%
映画(Titanic)	93.5%	91.8%	92.6%	91.0%	92.7%	91.7%	93.8%	91.5%	92.7%	92.5%	93.1%	91.7%
平均	92.1%	91.3%	91.9%	91.0%	92.5%	91.9%	92.8%	90.3%	91.2%	92.6%	92.1%	91.4%
増減(2006年-1988年)	-0.8%		-0.9%		-0.6%		-2.6%		1.4%		-0.7%	

の年度別平均値、最下欄には教科書ごとに7つの言語活動に対するカバー率の年度別平均値とその増減値を記した。

まず、全体の傾向を観察するため、Table 5の最下欄の増減の項目を左から右へ見ていく。1988年度と2006年度では、今回調査対象とした高等学校教科書5シリーズのうち、Unicornのみがカバー率の増加を示しており、他の4シリーズはいずれも減少していることがわかる。すでに、Table 4で見たとおり、Unicornは1988年度より2006年度の方が中学校と高等学校を合わせて学習できる総異語数が増加しているために、カバー率の上昇は当然と考えられる。

しかし、Table 4からは、MainstreamとMilestoneも総異語数の増加が認められるにも関わらず、Table 5からはカバー率の増加は見られない。このことから、どのような言語活動を念頭に置いた語彙の取捨選択を行うかが、教科書編纂に伴う新語を検討する際の重要な点であることが認識できる。また、高等学校での教育現場では、教科書採択の際の判断基準として、単に語彙数の多さだけでは「実践的コミュニケーション能力」を養成する上で、「使える英語」に直結する語彙と言うには不十分であることが理解できる結果となった。

次に、調査対象とした5シリーズの教科書が、実用性を表す音声英語の7つの言語活動に対し、どの分野において、英語が理解できる閾値と考えられる95%のカバー率が達成できているかを観察した。1988年度と2006年度では、両年度で唯一「サバイバル英会話」が95%のラインに到達していると考えられる。「サバイバル英会話」以外では、どちらの年度でも95%に達しているものは皆無である。長谷川・中條(2004)²⁸⁾の調査では、New Horizon+Unicornをサンプルとして、80年代・90年代・2000年代の中・高検定教科書語彙の実用レベルの比

較をした結果、95%のカバー率を達成できたのは唯一、音声英語の「サバイバル英会話」だけであった。教科書のサンプル数を5シリーズにして、80年代と現行を比較した今回の調査においてもこの傾向は一貫していることが判明した。

4.2.2 文字英語の言語活動

前項の音声英語の観察と同様に今度は文字英語の言語活動について、中学校と高等学校を合わせて学習できる年度別・教科書別語彙がどの程度の実用性を有するか、カバー率を計測した結果をTable 6に示した。Table 5と同様に、表の最右欄には7つの言語活動別に教科書5種のカバー率の年度別平均値、最下欄には教科書ごとに7つの言語活動に対するカバー率の年度別平均値とその増減値を記した。

全体の傾向を観察するため、最下欄の増減の項目を左から右へ見ていくと、1988年度と2006年度では、今回調査対象とした高等学校教科書5シリーズのうち、ここでもUnicornのみがカバー率の増加を示しており、他の4シリーズはいずれも減少していることがわかる。Unicornは1988年度より2006年度の方が中学校と高等学校を合わせて学習できる総異語数が増加しているために、カバー率の上昇は文字英語においても当然と考えられる。しかし、ここでも、MainstreamとMilestoneのカバー率の増加は認められない。このことから、文字英語においても教科書編纂の際にどのような語彙を取捨選択するかの難しさが納得できる。また、高等学校の教育現場での教科書採択の際の判断基準として、とかく語彙数の多寡や難易度だけに目が行きがちなことの反省材料ともなることを証明する結果となった。

次に、7種のうち、どの実用的言語活動において95%のカバー率が達成できているかを観察した。1988年度と2006年度では、どの教科書シリーズにおいても95%のラ

Table 6 The Percentage of Written English Vocabulary Covered by the Textbook Vocabularies

高校教科書名	Crown		Mainstream		Milestone		Sunshine		Unicorn		5種平均	
	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006	1988	2006
TOEIC リーディング	82.6%	81.2%	81.3%	80.9%	82.1%	82.2%	83.8%	79.9%	79.9%	83.6%	81.9%	81.6%
TOEFL リーディング	85.3%	83.0%	83.4%	81.6%	85.3%	83.4%	85.1%	81.0%	82.9%	85.5%	84.4%	82.9%
大学入学案内	84.1%	84.3%	83.4%	83.9%	82.8%	83.0%	85.1%	81.6%	81.9%	85.0%	83.4%	83.6%
TIME (英文雑誌)	82.6%	80.2%	80.6%	81.4%	81.0%	80.4%	83.0%	79.5%	79.5%	82.2%	81.4%	80.7%
News for You (ESL英字新聞)	90.1%	88.5%	89.6%	88.2%	90.0%	88.1%	90.8%	86.6%	88.5%	89.8%	89.8%	88.3%
生活案内	80.9%	79.7%	79.9%	80.0%	80.2%	81.0%	82.4%	78.9%	78.2%	82.5%	80.3%	80.4%
小説 (Harry Potter)	92.8%	90.6%	91.7%	89.5%	91.8%	88.6%	92.3%	90.0%	91.1%	92.3%	91.9%	90.2%
平均	85.5%	84.0%	84.3%	83.7%	84.7%	83.8%	86.1%	82.5%	83.1%	85.8%	84.7%	84.0%
増減(2006年-1988年)	-1.5%		-0.6%		-0.9%		-3.6%		2.7%		-0.8%	

インに到達しているものは見当たらない。音声英語に対して文字英語の難しさが垣間見られる思いがする。そのような中であって、1988年度と2006年度を最右欄の7つの言語活動別平均で観察すると、小説の*Harry Potter*が80年代と現行の教科書で共に90%以上のカバー率があり、調査対象とした言語資料の中で最も実用性が見込まれる。一方で、「生活案内」が他の言語活動と比較して最も低く、生活関連語彙が貧弱であることが検定教科書語彙の弱点であると考えられる。これらは、長谷川・中條(2004)²⁹⁾でも指摘され、サンプル数を増やした今回の検証調査でも同様の結果であった。特に、生活語彙の不足は、「役に立たない」と批判されることの多い我が国の英語教育の原因が、実はその出発点となる中・高の英語検定教科書から始まっているということを証明するものである。このことは、中條・長谷川・竹蓋(1993)³⁰⁾で指摘されて以来、今回の検証調査まで一貫して変わらない現実である。

5. まとめ

本研究の目的は、「実践的コミュニケーション能力」の育成を目標とする現行(2000年代)の学習指導要領に基づく、中・高の英語検定教科書語彙で可能となる実用性のレベルを、学習指導要領に「コミュニケーション能力」という言葉の登場しない1980年代の教科書語彙と比較し、その具体的変化を複数のサンプル調査を通じて計量的に明らかにすることであった。

サンプル調査に使用した中・高の英語検定教科書は、日本人英語学習者の一般的傾向を探るため、採択数の多さを考慮し、現行の教科書名に1980年代の教科書名がそのまま保持されているものを候補とした。そして、その候補の中から、高等学校用は大学進学者数の多い高校で使用される上級レベルの教科書5シリーズを選定した。シリーズの構成は、学習指導要領の新語数を表示する際の基準となっている、「英語I」「英語II」「リーディング(1980年代は英語IIB)」とした。

実用性のレベルを調査するために使用した言語資料は、グローバル化・情報化の中で「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」において言及されている内容を考慮し、TOEIC、TOEFLを含め、大学生に必要とされる音声英語と文字英語の言語資料という観点から、長谷川・中條(2004)³¹⁾で使用された音声英語と文字英語の各5分野7種から成る言語活動、合計14種の言語資料を使用した。その結果から明らかとなったことは以下のとおりである。

- ① 1980年代と2000年代で採択数最上位にあった中学校教科書は、学習指導要領に示された新語数の減少を反映して、異語数が減少するとともに延べ語数

も減少していた。

- ② 1980年代と2000年代で同じ教科書名を保持している高等学校教科書で、大学進学者数の多い高校で使用される上級レベルの教科書では、学習指導要領に示された新語数の減少を反映して異語数が減少しているものがある一方、それとは逆に異語数が増加している教科書もあった。
- ③ しかし、高等学校教科書の延べ語数は、調査対象とした5シリーズすべてにおいて減少しており、中学校教科書と同様に教科書で英語に触れる分量が減少している。
- ④ 中学校教科書と高等学校教科書で学習できる総異語数は、今回調査対象とした5種の高等学校教科書で比較した場合、2000年代で1980年代より減少したものが一方で増加したのもあった。
- ⑤ その結果、中学校では採択数最上位の教科書を使用した後、高等学校でどの教科書を使用するかによって、学習できる語彙数が、1980年代と2000年代でともに、最大800語前後の差が生ずることが明らかとなった。
- ⑥ 中学校と高等学校の英語検定教科書語彙の実用性は、調査した音声英語の7種の言語活動に対し、英語が理解できる閾値と考えられる95%のカバー率が達成できたのは、1988年度と2006年度では、両年度で唯一「サバイバル英会話」だけであった。
- ⑦ 一方、文字英語の7種の言語活動に対して、95%のカバー率が達成できたのは、1988年度と2006年度のどちらにもなかった。また、「生活案内」が最下位であったことから、生活語彙の不足が日本の英語検定教科書語彙の弱点であると考えられた。これら⑥と⑦は長谷川・中條(2004)³²⁾の調査と同様の結果であった。

以上のことを考慮にいたした場合、現行(2000年代)の学習指導要領の目標となっている「実践的コミュニケーション能力」の育成や、文部科学省の提唱する「英語が使える日本人」の育成は、はたして中・高で使用される英語検定教科書語彙で可能なのであろうかという疑問が浮かぶ。英語教育の理想とする目標だけが先行して、その基盤として必要不可欠な語彙の不足は、Canale(1983)³³⁾の定義する「コミュニケーション能力」の基本的部分を欠くことになる。荻谷・増田(2006)³⁴⁾は『欲ばり過ぎるニッポンの教育』というタイトルの本で、日本政府は「ニッポンの学校の身の丈(基本的な条件を含めた実力)を知ろうともせず、その改善を怠ったまま、要求のリストだけを増やしてきた」(p.243)と述べている。英語教育においても、中・高の限られた授業時間数で可能となる目標とその基本中の基本となる言語資料には十分な配慮が必要であると考えられる。大学での英語教育に

においては、現在の中・高の検定教科書で学習できる英語の現実を考慮した、きめ細かな指導が求められていると言える。

謝辞 本研究は、平成19～20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)課題番号19520480の援助を受けて行われました。

参考文献

- 1) 文部省、『中学校学習指導要領』, 東京, 大蔵省印刷局, 1998.
- 2) 文部省、『高等学校学習指導要領』, 東京, 大蔵省印刷局, 1999.
- 3) 文部省、『中学校学習指導要領』, 東京, 大蔵省印刷局, 1989.
- 4) 文部省、『高等学校学習指導要領解説 外国語 英語編』, 東京, 教育出版, 1989.
- 5) 吉富一, 佐々木輝夫(編), 『改訂 中学校学習指導要領の展開 外国語(英語)科編』, 東京, 明治図書, 1977.
- 6) 小川芳男他(編), 『英語教授法辞典 新版』, 東京, 三省堂, 1982.
- 7) Folse, K.S., *Vocabulary Myth: Applying Second Language Research to Classroom Teaching*, Michigan, The University of Michigan Press, 2004.
- 8) Laufer, B., “The Lexical Plight in Second Language Reading: Words You Don’t Know, Words You Think You Know, and Words You Can’t Guess, In Coady, J. & Huckin T. (eds.), *Second Language Acquisition*, Cambridge, Cambridge University Press, 1997, 20-34.
- 9) Canale, M., “From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy,” In Richards, J.C. & Schmidt, R.W. (eds.), *Language and Communication*, New York, Longman, 1983, 2-27.
- 10) 伊村元道, 『日本の英語教育200年』, 東京, 大修館書店, 2003.
- 11) 文部科学省, 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm.
- 12) 長谷川修治, 「英検2級とセンター試験に対する英語教科書語彙の効果—過去10年間の通時的調査—」, *Step Bulletin*, 15, 2003, 152-158.
- 13) 長谷川修治, 中條清美, 「学習指導要領の改訂に伴う学校英語教科書語彙の時代的变化: 1980年代から現在まで」, *Language Education & Technology*, 41, 2004, 141-155.
- 14) 中條清美, 西垣知佳子, 長谷川修治, 内山将夫, 「『ゆとり教育』時代の高校教科書語彙を考える—1980年代と2000年代の高校英語教科書語彙の比較分析からの考察—」, 『英語コーパス研究』, 15, 2008, pp. 57-79.
- 15) 時事通信社, 「<調査>総採択数3.2%増に: 来年度使用教科書の採択状況—時事通信社調べ」, 『内外教育』, 3897, 1987, 4-10.
- 16) 時事通信社, 「<調査>前年度比0.2%減の3585万冊に: 2006年度中学校教科書採択状況—文科省まとめ」, 『内外教育』, 5618, 2005, 2-4.
- 17) 時事通信社, 「<調査>新教科書「情報」も冊数減に転じる: 2006年度高校教科書採択状況—文科省まとめ(下)」, 『内外教育』, 5625, 2006, 4-11.
- 18) 出版労連, 『教科書レポート No.31』, 東京, 出版労連, 1987.
- 19) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 20) 中條清美, 西垣知佳子, 長谷川修治, 内山将夫(2008), 前掲論文.
- 21) Nation, I.S.P. *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge, Cambridge University Press, 2001.
- 22) Chujo, K. & Utiyama, M., “Exploring Sampling Methodology for Obtaining Reliable Text Coverage,” *Language Education & Technology*, 42, 2005, 1-19.
- 23) Chujo, K. & Utiyama, M., “Understanding the Role of Text Length, Sample Size and Vocabulary Size in Determining Text Coverage,” *Reading in a Foreign Language*, 17(1), 2005, 1-22. <http://nflrc.hawaii.edu/rfl/>.
- 24) 中條清美, 西垣知佳子, 長谷川修治, 内山将夫(2008), 前掲論文.
- 25) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 26) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 27) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 28) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 29) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 30) 中條清美, 長谷川修治, 竹蓋幸生, 「日米英語教科書の比較研究から」, 『現代英語教育』, 29(12), 1993, 14-16.
- 31) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 32) 長谷川修治, 中條清美(2004), 前掲論文.
- 33) Canale, M. (1983), 前掲論文.
- 34) 荻谷剛彦, 増田ユリヤ, 『欲ばり過ぎるニッポンの教育』, 東京, 講談社, 2006.

(H 20. 2 .12 受理)